

教育実践

## 「キリスト教人間学」の授業展開の一例 マザーテレサに導かれる人格形成

小林 宏子

### アブストラクト

人間学の科目担当者として学生の人格形成に携わった経験から得た知見を、教育実践の一例としてまとめたものである。キリスト者が少数派である日本の中で、カトリック精神に基づく全人教育の基盤教育科目として授業を展開する際、その内容がキリスト教の精神や概念の理解に重きを置くことは当然ではあるが、それと同時に、学びの環境としての雰囲気づくりに配慮してきたことを述べる。それは、学生が人格形成のために必要としているのは、他者とのかかわりであり、そのかかわりの中から人格の尊厳、共感的同伴、対話的態度、内面との対峙などの体験的理解をすることであると考えからである。また神の愛の体現者とされるマザーテレサを紹介し、隣人愛の実践に向けた力の源泉や、神が与える使命（召命）に応える選択が成し得る人格のあり方の可能性を知り、自身の成長への一歩を踏み出す助けとなるよう努めてきたことを述べる。

### はじめに

筆者が上智大学短期大学部（以下、本学）の「人間学」担当者となって 25 年が過ぎた。この日本社会の中でキリスト教教育に携わる場を与えられたことに深く感謝している。本学での新生向けの必修科目である「人間学 I」は昨年度で終了したが<sup>1</sup>、この春学期に上智大学で 2 年生対象の選択必修科目「キリスト教人間学」の 1 クラスを担当する機会を得、「聖書的人間観とマザーテレサ<sup>2</sup>の生き方」という科目名で開講することができた。学期末に実施された授業アンケートへの回答率は 36% とかなり低かったが、回答者の評価は 1 名を除いてはおおむね肯定的であり筆者にとっては貴重な経験となった。

本稿は筆者がこれまでの「人間学」教育において重視してきた事柄を、その授業展開の一例として論じるものである。第 1 章では、キリスト教人間観の基盤となる「人格の尊厳」や「神の像」などの概念の説明に合わせて、学生自身が自分の価値を意識できるよう共感的同伴を心がけたことを述べる。理論としては一人ひとりを大切に、その多様なあり方を肯定する

価値観に首肯していても実際に自分の固有のあり方やその価値を実感できている学生は少ないように思えるからである。第2章では、キリスト教教育の特徴である対話的かかわりを重視し、教員としても学生との対話に開かれた態度を持つことと、学生が自身の内面との対話に取り組みよう支援してきたことを述べる。第3章では、霊性教育について宗教リテラシー<sup>3</sup>の必要が論じられる昨今、マザーの信仰とその霊性に焦点を当てることで、学生が宗教一般に抱きがちな誤解を修正しながら、イエスに倣う生き方を使命（召命）として選ぶことと人間の意志の自由の間のかかわりを扱ってきたことを述べる。更に、マザーはこの無神論的世界で苦悩する人々のよき理解者、同伴者となると考えることを述べる。終わりにでは、マザーは、学生たちの人格形成にとってキリスト教とその価値観を肯定的に受けとめ、理解する助けや励ましを与える存在であると考えていることを述べる。

## 本論

### 第1章 人格教育における人格の尊厳の確信

#### 1.1. 自分という人間の尊厳とすべての人間の尊厳

「キリスト教ヒューマニズム」を特集した『神学ダイジェスト』の中のトビアス・ツィーママンの論文には「イグナチオ的教授法は、個性を尊重した上での人格教育を目的としている」<sup>4</sup>と書かれている。そして、その「教育とは、心と体、知性と感情を使い、一人一人が有している多種多様な可能性を伸ばす力添えをする」<sup>5</sup>ことであり、そこで奨励されるのは「生きることに関心を持つこと、優れた可能性を秘めた個性（才能）を埋もらさせることなく、さらにその個性（才能）を活かすための努力を惜しまないこと、高い目標に果敢に立ち向かいそれを達成することである」<sup>6</sup>とされている。

そこで、筆者も、本学の授業では学生たちが自身の固有の価値に気づき、その個性（才能）を活かす取り組みができるよう、その精神的土台作り注力してきた。それは、学生たちが自己の現実と向き合い、そのありのままを受容したうえで自分自身の心が望む方向の進路に向かって、具体的一歩を踏み出す勇気を持てるよう励ますことである。その最初には、学生自身が「自分で考え、自分で決める主体」であることの自覚を持つことが必要であると考えが、実は、この主体であることや人格（ペルソナ）であることへの理解が難しいことに気づく。

光延一郎は、西洋思想において長い歴史のあるペルソナという用語を人の「生きるあり方」として説明している<sup>7</sup>。

すなわち、ペルソナとは、精神的な価値を対象とするものである。ペルソナは、知的認識と意志の愛により、真理、善、美、友情や平和などの精神的価値を他者と共同で探究し、わかち合い、共有する交わりの世界で生きるあり方なのである。

そこで、授業では分かち合いの時間を大切に、学生たちが自身の感じ方や考え方には価値があると知るよう励ますことから始めた。その正誤や善悪、優劣の評価をせずに、まずは自分が感じていることと考えていることの実を認め、それらを言語化して認識し、分かち合いの場で表明し合い、聞き合う時間を大切にするよう指導した。各自が自分の心に正直に向き合い、自分が本当に望んでいることは何であるのかについてよく考え、他者の意見に耳を傾けながら視野を広げ、最終的には自分の判断に責任を持てる行為を選ぶ勇気を持つことが、自分の生きるあり方を主体的に決める最初のステップであると考えているからである。教科書を読み、授業内で動画を視聴した感想や意見を述べ合う時間が、時として周囲の反応や評価が気になるためか、或いは、自分の言いたいことの適格な言葉が見つけれないためか、なかなか発言できずにいる自分のもどかしさを経験する時間になる場合もある。

次に説明が難しいのは「神の像」という用語である。キリスト教では、人間は神の似姿として、神のように愛し愛されるかわりを生きるように造られていると信じる。そのため、神は人間に自分で考え判断する能力と、自らの行動を選ぶ自由を与えているが、選んだ結果には責任が伴うため、選ぶ前には神の言葉を無視せず、よく考える必要があることを説明する。創世記の人間の創造物語については、神の語られていない言葉に注目し、神の思いを想像するよう促してきた。今年、ソフィア人間学会において、この用語が持つ別の強調点を学ぶ機会を得た<sup>8</sup>。発表者の久保文彦は、創世記1章の「神の像」は、人間そのものや「すべての」人間の尊厳を強調する表現であることを解説していた。それは、この語の起源が聖書記者たちの創案なのではなく、すでにそれ以前から古代エジプト・メソポタミアに流布していた王権イデオロギーに由来する言葉であって<sup>9</sup>、その表現を聖書に採用するにあたって、それまでの意味を普遍化し、民族や国家の枠組みを超えた内容に拡張しているというのである<sup>10</sup>。すなわち、古代オリエント地域での神の像とは、神の代理人や神の威光を地上に現わす象徴としての王など、地上の統治者に限定された用語であったのに対し、創世記では人間そのものや人類全体が神の像として造られ、祝福されていると主張しているからである<sup>11</sup>。しかも、そこには男女間の差別も、社会の中に起こる序列化も存在せず、万人が等しく王的地位に高められていることの宣言として読むことができるという<sup>12</sup>。おそらく、この人間観は紀元前6世紀のパピロン捕囚という民族と信仰の危機の中で、自らの存在意義や人間の創造の目的を深く問い直した人々がたどり着いた確信であって、現代ではすべての人の尊厳と平等を守るための根拠となり得る表象だというのである<sup>13</sup>。

## 1.2. マザーの言葉に導かれる自己の尊厳の確信

ところで、すべての人の尊厳と価値を守ることにについて考えるとき、通常であれば学生たちが忌避し、差別しがちな人々までも含むことについて学生たちの心にまで響く呼びかけとなるのはマザーの証しである。確かに、彼女の活動を初めて知る学生の中には「自分には到底、あのようなことはできない」と早々と身を引いてしまう者もいる。しかし、マザーの

活動を自分が見習って行うための模範として見るのではなく、自分をも含む「ひとりひとりの人格の尊厳を証明するという仕方で行われている<sup>14</sup>」活動として見るように促すとき、学生たちは自分の中にある人の存在価値を判断する基準の取り方に気づく。彼らの提出物からは、競争社会の勝ち組、負け組、自己責任、タイパ、コスパなどの指標によって評価される社会に適応すべく懸命に努力する一方、内心では自分の存在価値を実感できずに不安を抱えている様子が伺える。そのような学生にはマザーの次のような言葉は、社会の価値観を一度相対化し、自分が自分に向けている評価基準を問い直す機会となる。

「わたしにとって大切なのはひとりひとりです」「イエスはたったひとりのために、ひとりの罪人のためにも死なれたでしょう」「どのひとりもわたしにとってはキリストで、イエスはひとりだけですから、今このときのその人が、わたしにとっては世界でたったひとりの人なのです」彼女は自分の仕事を大海の一滴にたとえる。「でも、その水がなかったら、大海すら一滴たりなくなるでしょう」<sup>15</sup>

更に、一人ひとり「神の最高傑作」という片柳弘史の表現<sup>16</sup>は、マザーがどのような状態の人にも神の像としての尊厳を認め、無償の愛と奉仕を捧げる価値があると考えていたことの意味を知らせ、自分をマザーの愛を受ける側に置いて考えるようにさせる。次の文も同様である。

「人間としての尊厳を育む場所、それが家庭に他なりません」と、マザー・テレサは言います。「人間としての尊厳」とは何でしょう。それは、人間としての自分の価値への、揺るぎない確信だろうと思います。人間の命は存在するだけで尊く、厳かな価値をもっている。自分は、自分であるというだけで生きる価値がある。その確信こそが「人間としての尊厳」であり、家庭こそ、それを育む場所だということです<sup>17</sup>。

実は、この「自分は、自分であるというだけで価値があるという確信」こそ、筆者が人間学教育で目指している人格形成の土台である。人格としての自分の生きるあり方を作り上げようとするときに必要となるのは、自身を根本で支える存在価値の確信である。授業内容の考察や友人との分かち合いを通して、自分はすでに家族とのかかわりの中で、その確信を得ていることに気づく学生がいる一方、周囲から期待されるあり方と自分の現実との間で葛藤していることに気づく学生もいる。本学の「人間学Ⅰ」の教科書『かわりの人間学』の「はじめに」の中で丹木博一は「本書は、自分自身の存在意義を問い求める旅の地図となるものです」と書いているが、実際、この科目は学生たちに自分の成長過程における現在地や目標までの道程を確認する機会となっている<sup>18</sup>。

ところで筆者は、今年の「キリスト教人間学」の科目名を「聖書の人間観とマザーテレサ

の生き方」としたが、受講生に履修の動機を尋ねたところ「マザーに興味や関心があって」選択したという学生が、77名中38名の49%と最も多く、「(選択) 必修科目だから」という理由の17名(22%)を大きく上回った。また、「一年次の人間学を学んで興味をもったから」や「聖書に関心があるから」などの理由も12名(16%)であった<sup>19</sup>。マザーのすべての人を無条件に受け入れ、惜しみなく奉仕する姿は、誰もが心の中で憧れる愛のあり方に共鳴するものと考えられる。

しかし、そうであればこそ授業で扱う時には、マザー自身の活動動機は社会の貧困対策のためではなく、あくまでも一人の修道者が神からそれを行うよう託された使命(召命)に応えるためであり、その神の望みとは、すべての人が神の愛を知り、「神の像」としての尊厳を回復することにあったことを強調する。しかも、マザーは傷つき苦しむ人びとに奉仕するとき、人間を愛するゆえに人となり、十字架上での身体的・精神的・霊的苦しみをすべても担ったキリストが、今も、それらの人の姿となって、人間からの応答に渴望しながら現れているものと受け取っていた<sup>20</sup>ことも説明する。

受講生の一人は一年次の人間学でマザーを学んだことがきっかけで、更に深く学びたいという動機から授業を選択し、期末課題にもマザーを取り上げた<sup>21</sup>。序論では以下のように書き始める。

キリスト教人間学では、聖書やマザーテレサから、人間の存在について学びを深めてきた。…中略…マザーテレサを突き動かしていた原動力とも言える彼女の信念について、それがどのようなもので、なぜ揺らぐことがなかったのかを論じる。そうしてキリスト教人間学の講義を総括することとしたい<sup>22</sup>。

そして、本論では、

人々がもつ人種・国籍・宗教などの背景に関わらず、全ての人間に価値があることを伝え、神の愛を示した…中略…目の前にいる「一人」に愛を持って接することで小さな規模から大きな規模へと愛を広げていくという信念が読み取れる。…中略…(マザーは)教皇フランシスコが語る「神はあなたを愛している」「キリストはあなたの救い主である」「このかたは生きている」<sup>23</sup>という三つの真理を体現した。

と書く。そして、結論では

マザーテレサは、…中略…小さな規模から愛を通じて人々を満たすという信念を持っていた。これらは、ただ彼女の心に存在していただけではない。彼女は、信念を原動力に変えて社会の中で実践することで、人々の笑顔や変化を目の当たりにし、変わりゆく

社会の中でも不変的なものとして信念を位置づけていった。

…中略…彼女の信念に基づいた活動は、戦争や紛争が世界各地で勃発し個人主義が進む現代で、重要な意味を持ち続けている。これらを心に留めながら、私も一つ一つのことに愛を持って向き合い、温もりを与えられる人を目指したい<sup>24</sup>。

と結び、マザーに導かれ、たとえ小さなことでも、信念をもって活動へとつなげることの力と価値を認め、自分から愛や温もりを与える人になるという姿勢を持つことを学んだことが分かる。

## 第2章 キリスト教ヒューマニズムの特徴としての対話的かわり

### 2.1. 自己の内面に向き合うための学生への同伴

第1章で述べた人格形成の土台づくりのためには、身近な他者となる教員とのかかわりは重要である。そこで筆者は、学生の提出物には可能な限り個別のコメントを返すよう努めてきた。それは、学生が課題に取り組む意欲を維持するのに役立つだけでなく、年ごとに理解の仕方や受け止め方が異なる学生の多様化に対応しながら同伴するためでもある。今年、上智大学の「キリスト教人間学」においても同じ手法をとったところ、授業アンケートで一人の学生から「事前課題に対して毎回フィードバックがあり、生徒ひとりひとりと向き合う姿勢がとても素敵だなと思いました」という言葉を受けた。受講生が多い科目では負担が大きい作業であるが、一方通行ではないかわりの意義を再確認することができた。

この対話の姿勢については、以前、本学の「人間学」の教科書として使用していた『現代人間学』の単元8「対話」において、理辺良保行がマルティン・ブーバーの思想を説明するキーワードの一つとして挙げている「存在確認」を意識してきた。

「存在確認」とは、相手の立場が自分と同じであろうと対立していようと、その他者をここに実存している存在として承認することである。それは単に「同意」することではない。同意は意見を受け入れることであり、「存在確認」は、そこに具体的に存在する人間を受容することである。だから意見を異にしている他の者の存在確認をすることはできる。存在確認は単なる理性的行為ではなく、全身全霊の行為なのである<sup>25</sup>。

ブーバーが論じるような全身全霊の対話はできないとしても教員の側にも学生の「存在そのものを受容する」意識や、まずは相手の「ありのまま」の存在を受けとめる態度が必要となると考える。学生にはそれぞれの歴史があり背景があり、多くの場合学生自身の責任とばかりは言えない複雑な事情を抱えている。親からの過干渉や過剰な期待に負担を感じている場合もあれば、いじめを受けた記憶に苦しんでいる場合もある。受験競争や部活動、習い事

における挫折の痛みを克服できずに劣等感を引きずっている場合もある。岡田尊司によれば、人は生後六か月から一歳半くらいまでの時期に形成された愛着スタイルの影響を大きく受けているという<sup>26</sup>。また、「成人でも三分の一くらいの方が不安定型の愛着スタイルをもち、対人関係において困難を感じやすかったり、不安やうつなどの精神的な問題を抱えやすくなる」<sup>27</sup> 傾向を持つというのであるから、アイデンティティの危機を経験しやすい時期の大学生に対しては、尚更、身近に寄り添う人の存在が必要となると考える。

そして、大学生の場合、気づきが起これば自ら学んだことを成長へとつなげていく力がある。課題や授業による内省を通して意識され言語化された記憶が、他者との分かち合いの中で受け止められ共感された経験に変わること、それまで否定的な出来事ではなかったことも、自分自身が固有の人格を形成する上での大切な要素となり得ることに気づくとき、自分自身や周囲と向き合う姿勢を変化させることが可能になる<sup>28</sup>。このことは河井亨がその著書の中で自分との関係を成長させるためには、自分を大切にセルフ・コンパッションが必要であることや<sup>29</sup>、気づいた事柄を言語化する力を養うことが重要であり、さらに、自分の価値観を築いてセルフ・オーサーシップを獲得するところまで成長するためには、学業だけでなく、それ以外の活動も含めた自分の経験全体を振り返って関連づけ、考察することが重要であると解説していることにも通じると考える<sup>30</sup>。

## 2.2. マザーに導かれるキリスト教との対話

マザーの活動を貧しい人びとの中に現存するイエスへの奉仕という視点で理解するように、キリスト教人間観の人格形成から「超越（神）とのかかわり」を外すことはできない。むしろ、神がそれぞれの人間に託そうと計画している生き方や使命を見出し、神への信頼の中で熟慮し、自分の意志で選択するという識別の作業が重要である。

しかし、学生の中には内省を通じて自分自身の内面と向き合う作業や、キリスト教に触れるのも初めてで、内面的な話題を話し合う活動に戸惑う者もいる。今回担当した「キリスト教人間学」のクラスでは、上智大学で初めてキリスト教に触れるという学生が41人（53%）と過半数を占め、キリスト教系の教育機関に通った経験があるか、家族や親族にキリスト教信者がいるなど、過去にもキリスト教に触れた経験がある学生26人（34%）を上回った<sup>31</sup>。したがって、大学で初めてキリスト教に触れる学生が、教員からの信仰の押し付けやマインド・コントロールを警戒することは健全な反応であると言える。そのため、学生が授業内容を自分の現実に合わせてよく考え、「宗教とカルトが、似て非なるもの<sup>32</sup>」であることを理解できるよう配慮する必要がある。一方的な教え込みを避け、双方向の対話によって学生からの問いを受け止める姿勢をもつことで、学生たちは自由にキリスト教についての考察を深めることが可能になると考える。

そこで、今回、教科書の一冊に選んだのは片柳弘史の『何を信じていきるのか』<sup>33</sup>である。地方の大学に通う一人の学生が教会の神父との対話を繰り返しながら、福音の教えを自分自

身の現実に照らして考えていく内容である。競争社会の中で自分を見失わないための知恵となる考え方だけでなく、神が一人ひとりに使命を託そうとしていることや、聖書の言葉を味わったり、祈りによって自分の心の奥の本当の望みと向き合っただけでなく、神の望みである愛と出会い、その愛を生きる自分の使命のあり方を見つけてゆけることなどが語られている<sup>34</sup>。また、マザーに関する言及が多いため、その都度、理解を深めるための知識として、創世記1章の記述の解釈や人間に自由を与えた神の思いを想像して考えること、イエスの生涯と最後の晩餐、イエスの受難と死が持つ救い意味と贖いという用語について、更に、イエスの復活がもたらす希望の意味などの説明を加えることができる。また、マザーの活動の原動力を知るためには、カトリック教会が召命と呼ぶ、神の招きに応じて自分の人生を献げる生き方の説明も必要となる。特に、三つの誓願、その中でも従順の誓願は、神の権威が人間の自由を制限するのではないかと考え、誤解や抵抗を生みやすい。そのため、もう一冊の教科書に指定した和田町子の『マザーテレサ』の中で説明されている「命令と服従ではなく、呼びかけと応答という関係」であることを強調し、人間には応えることも応えないこともできる行為選択の自由があることや、返事を出す前に疑問点について神と対話することも可能であることを説明する<sup>35</sup>。

授業では、マザーが日本を訪れた際の動画を視聴することを通して、日本社会の現実に照らして考えられるようにする。また、「約2000年前にイエスに出会った人々が受けた神から愛されているという実感は、マザーに出会う人々がわずか5分だけの面会によって、自分はマザーに世界中の誰よりも愛されていると実感できたような感覚だったのではないか」という筆者の感想を伝えることで、一度でも「神の体験」と呼び得る深い出会いの経験をすることが、その人の生きる姿勢全体に大きな影響を与える場合があることを想像できるようにする<sup>36</sup>。

教皇レオ14世が「教育界の聖年の祝祭」に集った教育者たちに向けてのスピーチで、聖アウグスティヌスを引用してキリスト教教育の基礎となる4つの側面<sup>37</sup>の最初に「内面性(interiority)」を挙げ、「人を教える本当の教師は人間の心の中にいる方(キリスト・聖霊)であり、真実を伝えることができるのは、人々の間の深い出会いによる」と語るように、人間の心の中で働く神との出会いにつながる人間同士の深いかかわりの場を準備することが、本学の重要な使命の一つであると考えられる。

### 第3章 マザーに学ぶすべての人を尊重する霊性の生き方

#### 3.1 すべての人々との対話に開く姿勢

宗教には含まれないとしても島蘭進が解説するとおり日本社会でも「スピリチュアリティ<sup>38</sup>」や「マインドフルネス<sup>39</sup>」などの言葉は広く浸透しており、瞑想や一定の身体活動の実践によって自身の内面と向き合うことで精神力の強化や自己変容、心身の癒しを目指す

人々は増えている<sup>40</sup>。また、アルコール依存症の人々の自助グループやグリーフケアなどの領域で活用される「限界意識のスピリチュアリティ<sup>41</sup>」や、医療や介護や教育界の人々、また、ボランティア活動に携わる人々によって共有されている「ケアのスピリチュアリティ<sup>42</sup>」も困難を抱える人々の生きる力を支える役割を担っている。

島蘭進は次々と新しいスピリチュアリティが現れた背景の一つとして、従来の救済宗教側の問題として、「信じる」か「信じない」か、「救われる」か「救われない」かという二分法的発想で人々の間に線を引く傾向が見られたことを挙げている<sup>43</sup>。それに対して、スピリチュアリティのほうはもっとおおらかな形で人々に寄り添い、彼らが実際に求めている癒しや解放、生きづらさの解消を提供できているために、本来なら救済宗教が備えていた救いの機能を分化する形で現れた動きなのではないかと述べている<sup>44</sup>。

一方、寒野康太はカトリック教会側のすべての人々に寄り添う姿勢への変化を指摘し、教皇フランシスコの『Fratelli tutti (兄弟の皆さん)』には非キリスト教的世界に向き合う姿勢としての包括性が見られると言う<sup>45</sup>。彼は、教皇ベネディクト 16 世の時期には、欧州社会の世俗化の中で「少数派」となったカトリック教会が、いかにしてそれまで保持してきた伝統や価値を社会の中に可視化できるのかに力点があったため、世界と対話するとは言いつつも「社会の病理を診断」する姿勢が見られたという<sup>46</sup>。これに対し、教皇フランシスコの場合は教会のアイデンティティはこの世界の中で新しく何を学び取り、その受容したことをどう表現するかで示されると考え、教会の優位性を保つために世界と論争するのではなく、相手に学ぼうとする対話の姿勢が見られたという<sup>47</sup>。学生たちの中には期末課題の指定図書『使徒的回勅 キリストは生きている』の中に、教皇フランシスコが若者たちの現実を理解し、寄り添う姿勢でいることを感じ取る者もいた<sup>48</sup>。

教皇は若者たちに対して「兄弟愛の道」を歩むよう促し、貧しい人々や苦しむ隣人に寄り添う実践こそが信仰を現実の中で鍛える最良の場であると説いている。実際、ただ教会の教義を学ぶだけでは、信仰は生きた力とはならない。人と共に泣き、祈り、仕えることによってこそ信仰は成立する。このような実践的な信仰の生き方は、現代社会においてますます重要性を増しているはずである。では、信仰は今をどう生きる力にどう繋がるのだろうか。信仰は希望を可能にするのである。今日、世界は不確な要素に満ちていて若者たちはしばしば自分の将来に対して明るい展望を持たずにいる。戦争や災害、差別、疎外など、現代の多くの課題が若い世代に重くのしかかっている。そのような現実の中で信仰は、現実逃避ではなくむしろ現実を直視し、それでもなお歩み続けようとする勇気を与える。教皇は、「教会が若くあり続けるためには、若者の中に宿る希望と直観と信頼に学ばなければならない」と述べ、若者の信仰が教会全体を活性化させる原動力になりうると語っている<sup>49</sup>。

こうした教会の側の「他に学ぶ謙虚さや二者択一を迫らないあり方」<sup>50</sup>については、川島堅二も日本の宗教教育に求められる態度であろうと述べる。また、若松英輔は「理解する前に尊重する」ことが宗教リテラシーとして望まれる態度であると述べ<sup>51</sup>、小原克博は「その人が尊んでいるものを…中略…十分に理解できていなくても、私も尊びますという境地に達する宗教リテラシー」が望ましいと語る<sup>52</sup>。

この点でも、マザーは、奉仕する相手がイエスであるように敬う態度で接することで実現している。更に、学生たちがマザーから衝撃を受けることの一つは、マザーが相手を特定せずすべての人に同じ愛を注いだだけでなく、反応においてもすべてを受け入れていた点である。マザーが社会から称賛だけでなく批判をも平然と受けたこと、しかも、それらの非難を次のように受けとめていたこと<sup>53</sup>は、周囲の反応を気にせずにはいられない学生たちにとって、神への徹底的な信頼が人を自由にすることの証しとなる。

「昨日、私は名誉市民でした。それで『ありがとうございます』と言いました。どちらでもいいのです。同じ御手から来ますから。明日、もし人びとが『十字架にかけろ』といったら——結構です。同じ愛の御手です」<sup>54</sup>

ある学生は、マザーに信仰と愛が一つになっている姿を見ている。

マザーテレサの生涯は、信仰と愛の一致を体現するものであった。彼女は目の前の一人の人に仕えることを通じて、神に仕えることを信仰として実践した。「わたしはキリストに仕えている」という言葉の通り、彼女にとって信じることは、見捨てられた人、孤独な人、病気の人の中にイエスを見ることであった。マザーは単に貧しい人に施しを与えるのではなく、愛を持って一人一人に敬意を持って接していた。信仰とは物質的な施し以上に、心を込めて他者と関わることだと理解していた。孤独な人、見捨てられた人、社会の片隅で生きる人々に寄り添うマザーの姿は、信じることに愛が変わる瞬間そのものである。また、彼女は批判などの厳しい意見も同じ神によって与えられたものとして受け入れていた。このような姿勢は、信じることに愛することがかたく結びついていることを強く示している<sup>55</sup>。

### 3.2 マザーに見る愛の奉獻の生き方

このようにマザーを見れば、キリスト教が目指す本当の信仰や愛がどのような実践の形となるはずであるのかは明らかであるが、筆者が特筆したいのは、マザーの誓約（誓願）への忠実さである。授業では詳しく説明する時間は取れないのであるが、マザーは神の愛の宣教者の会の創立の頃から「霊的な闇（霊の暗夜）」<sup>56</sup>に陥り、その苦痛は生涯消えることはなかったと言われる。しかし、ごく一部の司祭以外には、その事実をまったく気づかれることなく

その生涯をまっとうした。筆者はここに神の恵みと人間の自由意志の協働が成し得ることの十全な証を見る。マザーは、確かに恐ろしいまでの深い寂寥感や空虚感に苦しんでいたのであるが、同時に、その闇を神に対する完全な委託とイエスとの一致のうちに引き受けることが、自分の召命の「霊的一面」であると悟ってからは、闇を愛するようにさえなったからである<sup>57</sup>。マザーのこのような召命の理解の仕方と実践を可能にするにも「宗教とカルトが、似て非なるもの」<sup>58</sup>であることのしるしがあると考えられる。

前掲の『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』の中で櫻井義秀が指摘する通り、宗教行為としての献金やお布施は、報酬や代償という意味を含む対価サービスではなく、一方的な贈与の側面を持つはずである<sup>59</sup>。彼が贈与を「お返しをしたいという気持ちを表すもの<sup>60</sup>」と述べるように、キリスト教の場合も重視されるのは捧げる人の信頼や委託の心<sup>61</sup>であり、神の前に立つ人間の心の態度<sup>62</sup>である。マザーの生涯に及ぶ奉獻の場合も、何かを恐れたり期待したりする動機からではなく、ただひたすら神を喜ばせたいという愛を動機としてしている。しかも、そこには1942年に立てた私的誓願への忠実さも大きく働いていたと言われる。マザーは当時、「ほんとうに美しいことをささげたかった、何一つ残さないで」という熱意から、「誓願を破れば大罪に値するという束縛のもと、神が求められるすべてをささげるといふ、『神に何一つ拒まない』誓願を立てた」<sup>63</sup>。この誓願について、コロディエチュックは、「真に愛の愚かさであるこの誓願は、あらゆる状況にあつて、神に『はい』とすることを決意し、『最後の一滴まで御血を飲み干す』マザーテレサの望みを表している」と書いている<sup>64</sup>。このようなマザーの純粋な愛と誓約への誠実さは、さまざまな条約や合意宣言でさえ簡単に反故にされ撤回されてしまう現実社会の中にあつて、神の約束は取り消されないことの力強い証となると同時に、神の像としての人間の自由意志が成し得ることの貴重な証であると言えるであろう。

ある学生は、信じるのが困難な時にこそ、祈りという行為としての応答が意味を持つことを述べている。

「信じる」という行為は、心から納得しているから成立するものではない。むしろ、信じきれない、理解できないという感情と同居しながら、それでもなお語りかけようとするとともに、その本質が現れる。講義で取り上げられたマザー・テレサの手紙には、「神がいると感じられない」「祈っても、何も返ってこないように思える」といった苦悩が記されていた。だが、彼女は祈りをやめなかった。それは、「神を信じているから祈る」のではなく、「祈りという行為を通して、神との関係を持ち続けようとした」からである。…中略…

神は、論理や知識で説明しうる存在としてではなく、関係を生きる対象として、祈りの中で応答されている。信じられなさがあるからこそ、信じる行為が試され、祈りという応答が生まれる。その継続にこそ、信仰のリアリティがあるのではないか<sup>65</sup>。

### 3.3. 現代世界の闇の中で苦しむ人々の同伴者であるマザー

筆者にとって、マザーについて語ることは、イエスの受難と死の意味を説明することにつながる。ルカ福音書 23 章 32 節～ 43 節を取り上げながら、二人の犯罪人と共に十字架に付けられるイエスとは、別の見方をすれば、その二人の傍らにまで赴いて救いへと招く神の愛の姿でもあると説明する。その招きに対しひとりはいエスを罵り、もうひとりはいエスを受け入れる。救いはあくまでも一人ひとりの応答にかかっているのである。そのため、マザーは自身の霊的闇が「地獄の苦しみ」<sup>66</sup>であり、また、そのような状態の中では、神に「ノー」と言ってしまうかねない危機を体験しているからこそ、自分の「イエス」という応答には、霊的な「連帯と償い」<sup>67</sup>の意味があることにも気づいていた。

ラニエロ・カンタラメッサは、霊的闇の孤独と苦悩を召命として引き受けたマザーを『『神が存在しないかのように』生きるポスト近代における理想的な宣教者』<sup>68</sup>、「無神論者の傍らにいる神秘家」<sup>69</sup>と呼ぶ。それは、「闇夜の体験をした魂は、何も与えない、何も約束しない、閉ざされた天の下、天国さえ約束しない神に、ずっとしがみついている<sup>70</sup>」ことで無神論に対する生きた反証となるからである。しかも、それを可能にさせているのは神であるからこそ<sup>71</sup>、マザーは「神の恵みを生きることの最大限の広がりとはどのようなものなのかを、まるで拡大鏡のように示してくれる<sup>72</sup>」人なのである。マザーは自身の愛と苦しみの両方において、神をこの世界に出現させた人であり、「無味乾燥のとき、祈りが闇い、苦難、『嘆きの壁』に頭を叩きつけることになったとき、どのように振る舞えばよいかを<sup>73</sup>」教える人である。それは、神を信じるのが困難な時にこそ、微笑みを絶やさずに神との交わりに留まる意志を貫くことが、神とのより深い一致と交わりに進むための、神からの招きに応えることになるという証である。

## 終わりに

神の愛の体現者であるマザーの存在は学生たちの純粋な心を惹きつけ、神の像としての自分の存在価値に気づき、すべての人の中にも自分と同じ尊厳を認め、互いに愛し合うよう勧めるキリスト教を理解する助けとなる。世界はますます自己利益を最優先にする方向に進み、不正や暴力を厭わない人びとの力が増大しているように見えるが、マザーの人生による証は、神の像として創られた一人の人間が、神の愛に自分を一致させて生きるときに、どのような愛の働きが実現可能となるのかを明示している。神などいなくても生きていけると思いながらも、愛し合うかわりから切り離された人びとが抱える苦しみは深刻化する一方の現代であればこそ、未来に向かって自分の生きるあり方を選ぼうとする学生たちには、神の愛を証する召命を貫徹し、聖人とされた後でもなお、その働きを続けているマザーのような同伴者の存在を知る必要があると考える。教職を退く筆者もまた、マザーに導かれる人格形成の歩みを続けるつもりである。

## 注

- <sup>1</sup> 2025年度の募集停止により2024年度生が最後の新生生であった。
- <sup>2</sup> 教皇フランシスコにより2016年9月4日に列聖されているので「コルカタの聖テレサ」と呼ぶべきであるが、日本ではマザーテレサの呼び名が一般的であるためそちらを採用する。また、本稿ではマザーとだけ記す。
- <sup>3</sup> 島園進、釈徹宗、若松英輔、櫻井義秀、川島堅二、小原克博『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』NHK出版、2023、pp.70,74-76,82,146-150,152,154-155。他に、川島堅二「大学生と宗教リテラシー 特にカルト予防の観点から」『キリスト教文化研究所紀要』41巻、pp.17-34、2024年3月5日、<https://sophia.repo.nii.ac.jp/records/2015017>（参照日2025年9月15日）p.18では「宗教に対して適切に対応するための知識と倫理的能力」と一応の定義を示している。
- <sup>4</sup> トビアス・ツィーママン（三嶋百合子訳）「イグナチオの教授法—ヒューマニズム+（プラス）の精神—」『神学ダイジェスト』上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会、No.136 2024夏季号、pp.9-19、p.11上段
- <sup>5</sup> 同上、p.11下段
- <sup>6</sup> 同上、p.11下段
- <sup>7</sup> 光延一郎『『キリスト教人間学』とカトリック的キリスト教ヒューマニズム』『人間学紀要』52号（2022年）pp.9～39、p.26
- <sup>8</sup> ソフィア人間学会第53回大会での久保文彦の発表である。『『神の像』としての人間～キリスト教ヒューマニズムの核心をなす人間理解～』、2025年9月6日発表資料、pp.6-7参照
- <sup>9</sup> 同上、発表資料、pp.6-7
- <sup>10</sup> 同上、p.10
- <sup>11</sup> 同上、p.8
- <sup>12</sup> 同上、p.7
- <sup>13</sup> 同上、p.10
- <sup>14</sup> 和田町子『マザーテレサ』清水書院、2015、pp.180-181、「マザーテレサのライフワークの中核をサンネス教授は『生命の尊厳』という言葉で表現した。それは貧しい人びとに対するマザーテレサの仕事が上から見下す憐れみではなく、ひとりひとりの人格の尊厳を証明するという仕方で行われていること、また、この道によってこそ、人間家族を引き裂いている深い溝に橋渡しをすることができると説明した」より
- <sup>15</sup> 同上、p.191
- <sup>16</sup> 片柳弘史『何を信じて生きるのか』PHP研究所、2022、pp.18-23
- <sup>17</sup> 片柳弘史『祈るように生きる マザーテレサと共に』ドンボスコ社、2015、p.128

- <sup>18</sup> 丹木博一編著『かわりの人間学』（改訂版）上智大学短期大学部、2018、p.3
- <sup>19</sup> 因みに、未回答は10名（13%）であった。
- <sup>20</sup> マザーテレサ（著）、ブライアン・コロディエチュック（編集・まえがき著）、（原田葉子訳）、『あわれみへの招き 愛する心、仕える手』、女子パウロ会、2020。P.62「マザーの霊性にみられるおもな特徴の一つは、貧しい人びとの中で最も貧しい人の内に、苦しみ痛む姿となられたキリストを見いだしたことです。この『苦しみ痛む貧しい人の姿となられた』という表現はきわめて特別な意味をもっています。貧しい人びとの中で最も貧しい人、というだけでなく、見いだすのが困難な、苦しみ痛む姿となられたイエスを認める、そこにイエスがおられる、渴いておられると信じ、ともにあろうとすることです」参照
- <sup>21</sup> 引用は、授業最終回のリアクションペーパーの用紙（Google Form）に「『キリスト教人間学』のために提出した課題を教員の論文資料として使用してもよろしいですか。（学生名は匿名にし、個人が特定されない形にします。）」という質問を含めることで、「了承」の意志を確認した学生に限っている。
- <sup>22</sup> 受講生Aの期末課題、序論より
- <sup>23</sup> 教皇フランシスコ『使徒的勧告キリストは生きている』カトリック中央協議会、2019、130節、p.97
- <sup>24</sup> 受講生Aの期末課題、結論より
- <sup>25</sup> 理辺良保行「8対話」、ハイメ・カスタニエダ+井上英治編『現代人間学』春秋社、1999、p.153
- <sup>26</sup> 岡田尊司『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』光文社新書、2011、p.25
- <sup>27</sup> 同上、p.48
- <sup>28</sup> 一人の学生は期末課題の小論文で、いじめを受けた経験から人に心を閉ざしていたところを、授業を通して、寄り添ってくれる友人の好意を受けとる勇気を持つことの必要性に気づき、人間不信から信頼することへと転換する機会と得たことを述べている。他に岡田尊司『愛着障害の克服』光文社新書、2016、pp.297-298には「『振り返りの力』を高めることは、愛着障害の克服のためにも、自分が誰かの安全基地になるためにも必要な課題である」とある。また、前掲『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』p.296には「愛着障害を克服する場合、否定的な認知を脱するということが、非常に重要になる。…中略…大事なのは、どんな小さなことでもいいから、自分なりの役割をもち、それを果たしていくということである。自分にできること、自分の得意なこと、人が嫌がってやりたがらないことなど、何でもいいから思い切ってやってみることである。」とある。
- <sup>29</sup> 本稿執筆の途中、2025年9月17日上智大学FDセミナー「『大学生の学びと成長』について」をきっかけにして知り、とても参考になった。河井亨『大学生の学びと成長 知識・他者・自分との関係から人生をつくる』ナカニシ出版、2025、第4章 pp.153-

216 参照

- <sup>30</sup> 本学の「人間学Ⅰ」では「自分とのかかわり」「他者とのかかわり」「超越とのかかわり」という順番で考察を進めるが、河井亨の著書は、「知識との関係」「他者との関係」「自分との関係」の順の構成である。
- <sup>31</sup> 未回答は当日の欠席者も含め 10 人（13%）であった。
- <sup>32</sup> 島藺進他、前掲書『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』、p.17、若松英輔の発言より。
- <sup>33</sup> 片柳弘史、『何を信じて生きるのか』PHP 研究所、2022
- <sup>34</sup> 同上、pp.47-53、「一. 自分を信じる 6 人生の意味」
- <sup>35</sup> 和田町子、前掲書、p.34。合わせて pp.32-39 召命の生き方における人間の自由について、及び、pp.49-58 誓願についての説明を参照する。他に井上英治・片山はるひ「4 自由—成熟と喪失、そしてあらたな成熟」『現代人間学』春秋社、1999、p.70-71。時間と歴史を超える“至高”の次元からの「招きや使命」として説明されている部分を参考にする。
- <sup>36</sup> 和田町子、前掲書、pp.47-48「修道者とは」の説明が参考になる。「しかし、キリストは 2000 年前の過去の人ではないか。その過去の人に従い、ともに歩むとはどういうことか、…中略…何を体験するのであろうか。…中略…ひとりの人間が、あるとき、一つの光、一つの声、一つの言葉に触れるということがある。その出会いは日常の経験のなかに吸収してしまうことのできない『何か』を、比較のしようのない確かさで感じさせる。それは…中略…この日常性を超える地平があり、それこそ、意味、光、求めるべきいのちであることを悟らせるような体験である。…中略…その体験が自分の生き方全体に意味を与えるように思うのである。」他に修道召命ではなくても「神との出会い」と呼ばれる経験に支えられる生活を証する言葉はたくさんある。一例として「福本峻平の本」制作委員会『なぜ君は笑顔でいられたの？ 福本峻平 神と人々に愛されたその生涯』フォレストブックス、2022 を挙げるができる。p.112 で、クリスチャンになる儀式の中で感じたキリストの温もりをずっと保っていたと語っている。
- <sup>37</sup> “ADDRESS OF HIS HOLINESS POPE LEO XIV TO EDUCATORS ON THE OCCASION OF THE JUBILEE OF THE WORLD OF EDUCATION” 31 October 2025. Vatican. <https://www.vatican.va/content/leo-xiv/en/speeches/2025/october/documents/20251031-giubileo-educatori.html> (参照日 2025 年 11 月 3 日)
- <sup>38</sup> 島藺進『なぜ「救い」を求めるのか』NHK 出版、2023、p.180、及び、前掲『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』、pp.100-101 参照。他に岡田尊司『愛着障害の克服「愛着アプローチ」で、人は変われる』光文社新書、2016、pp.290-293 参照
- <sup>39</sup> 島藺進、『なぜ「救い」を求めるのか』、p.195
- <sup>40</sup> 同上、pp.181-182。ニューエイジ運動、ヨーガや瞑想、中国や日本の「気」や「陰陽」の理論や実践など
- <sup>41</sup> 同上、pp.184-185。島藺進独自の用語。大切なものの喪失や死別の経験などの深い悲

しみや心の痛み、自分の力では克服できない葛藤や苦難、向き合うことが困難な死の恐怖、悲嘆などの「スピリチュアルペイン」を抱えた人々を支える領域の人々に共有されている。

<sup>42</sup> 同上、pp.188-192

<sup>43</sup> 同上、p.186

<sup>44</sup> 同上、p.190

<sup>45</sup> 寒野康太「教皇文書『Fratelli tutti (兄弟の皆さん)』に見られる神学的特徴—包括性ということ」『社会と倫理』、第38号、南山大学社会倫理研究所、2023、pp.21—51

<sup>46</sup> 同上、p.49

<sup>47</sup> 同上、pp.39-40、p.24では『Fratelli tutti (兄弟の皆さん)』は「すべての善意の人」が名宛人となっており、教会の外にある人々に対して、同じ人類として語ろうという姿勢で書かれていることに注意を向けさせる。

<sup>48</sup> 2名が「寄り添い」の用語を使って明確に言及していたが、残念ながら1名は引用には不承知であり、もう1名は未回答であったため、論拠としての引用はできない。表現として近い内容の学生の文章を引用する。

<sup>49</sup> 受講生 B 期末課題、本論より

<sup>50</sup> 島蘭進他、前掲『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』p.105で、川島は他に「やめる手続きが明示されていること」も加え、今後の（伝統）宗教のあり方のヒントとして述べている。

<sup>51</sup> 同上、p.154

<sup>52</sup> 同上、pp.154-155

<sup>53</sup> 同上、p.191

<sup>54</sup> 和田町子、前掲書、pp.192-195

<sup>55</sup> 受講生 C 期末課題、本論より

<sup>56</sup> マザーテレサ、前掲『来て、わたしの光になりなさい！』、p.344。霊的指導者に「1948年12月、仕事が始まりました。1950年にはシスターたちの数が増え、仕事も増えていきました。ところが神父様、1949年あるいは50年以来、この恐ろしい喪失感、未知の暗闇、寂寥感、神に対する絶え間ない欲求などが、わたくしの心の奥深くに痛みを与えています」と報告している。

<sup>57</sup> 同上、pp.350-351。マザーは、黙想会の霊的指導者ヌーナー神父への手紙の中で、「過去十一年をとおして初めて、わたくしは暗闇を愛するようになりました。…中略…イエスは、もはやご自身では苦しむことができないので、わたくしのうちで苦しむことを望んでいらっしゃることに深い喜びを、今日ほんとうに感じました」と書いている。

<sup>58</sup> 島蘭進他、前掲『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』、p.17

<sup>59</sup> 同上、p.74

- <sup>60</sup> 同上、p.74
- <sup>61</sup> ルカ 21 章 1～4 節、貧しいやもめの献金のエピソード
- <sup>62</sup> ルカによる福音 18 章 9～14 節。神殿でのファリサイ派と徴税人の祈りのたとえ話。
- <sup>63</sup> マザーテレサ、前掲『来て、わたしの光になりなさい!』、p.56
- <sup>64</sup> 同上、pp.56-57、他に、p.347「神がお望みになることは何でも、お望みになるように、お望みになるかぎり、なさいますように。わたくしの闇が誰かの魂の光になるならば、いいえ、たとえそれが誰のためにもならないとしても、一わたくしは神の野の花となることで全く幸せです」参照
- <sup>65</sup> 受講生 D 期末課題、本論より
- <sup>66</sup> ラニエーロ・カンタラメッサ著(太田綾子訳)『マザーテレサの霊性』、女子パウロ会、2021、pp.55。「魂が、地獄で受ける永遠の苦しみとは、神を失うことだと言われていきます……。わたしは魂の内に、まさにこの恐ろしい地獄の苦しみを体験しています」
- <sup>67</sup> 同上、pp.56-57。「マザーテレサはこの彼女の『無神論』における連帯と償いという性質に気づき、次のように書いています。『イエスの光に背を向けた、これほど神から遠くあるこの世界に生きることを望みます。人々を助けるため、彼らの苦しみの幾ばくかをわたしの身に負うために。もしいつの日か聖人になるとしたら、わたしは“闇の聖人”になるにちがひありません。地上で、闇の中にいる人たちの光となれるように天国をいつも留守にしているでしょう」
- <sup>68</sup> 同上、p.57
- <sup>69</sup> 同上、p.54。「現代社会には新しいカテゴリーの人々がいます。真摯な無神論者「神の沈黙」を苦しみのうちに生きる人、神を信じないがそれを誇りにはしていない人、実存的不安とすべての空虚さを体験している人、自ら「霊の暗夜」を生きている人」そのような無神論者の同伴者となれる神秘家としてマザーを表現する。
- <sup>70</sup> 同上、p.58
- <sup>71</sup> 同上、p.58。他に、マザーテレサ、前掲『来て、わたしの光になりなさい!』 p.345
- <sup>72</sup> ラニエーロ・カンタラメッサ、前掲書、p.61
- <sup>73</sup> 同上、p.61

## 参考文献一覧

- ・岡田尊司『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』光文社新書、2011
- ・岡田尊司『愛着障害の克服』光文社新書、2016
- ・片柳弘史『祈るように生きる マザーテレサと共に』ドンボスコ社、2015
- ・片柳弘史『何を信じて生きるのか』PHP 研究所、2022
- ・河井亨『大学生の学びと成長 知識・他者・自分との関係から人生をつくる』ナカニシ出版、2025

- ・教皇フランシスコ『使徒的勧告キリストは生きている』カトリック中央協議会、2019
- ・島菌進『なぜ「救い」を求めるのか』NHK出版、2023
- ・島菌進、釈徹宗、若松英輔、櫻井義秀、川島堅二、小原克博『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』NHK出版、2023
- ・丹木博一編『かかわりの人間学』（改訂版）上智大学短期大学部、2018
- ・「福本峻平の本」制作委員会『なぜ君は笑顔でいられたの？ 福本峻平 神と人にと愛されたその生涯』フォレストブックス、2022
- ・マザーテレサ（著）、ブライアン・コロディエチュック（編集・解説）（里見貞代訳）、『マザーテレサ 来て、わたしの光になりなさい！』、女子パウロ会、2014
- ・マザーテレサ（著）、ブライアン・コロディエチュック（編集・まえがき著）（原田洋子訳）、『あわれみへの招き 愛する心、仕える手』、女子パウロ会、2020
- ・ラニエーロ・カンタラメッサ（太田綾子訳）『マザーテレサの霊性』女子パウロ会、2021
- ・和田町子『マザーテレサ』清水書院、2015（新装版）

### 論文記事・デジタル記事

- ・川島堅二「大学生と宗教リテラシー 特にカルト予防の観点から」『キリスト教文化研究所紀要』41巻、2024年3月5日、pp.17-34  
<https://sophia.repo.nii.ac.jp/records/2015017>（参照日 2025年9月15日）
- ・寒野康太「教皇文書『Fratelli tutti（兄弟の皆さん）』に見られる神学的特徴—包括性ということ」『社会と倫理』第38号  
南山大学社会倫理研究所、2023、pp.21-51  
<https://nanzan-u.repo.nii.ac.jp/records/2000398>（参照日 2025年10月29日）
- ・教皇庁 聖年（2025年）10月30日～11月2日 教育界の祝祭での教皇レオ14世メッセージ  
“ADDRESS OF HIS HOLINESS POPE LEO XIV TO EDUCATORS ON THE OCCASION OF THE JUBILEE OF THE WORLD OF EDUCATION” 31 October 2025. Vatican  
<https://www.vatican.va/content/leo-xiv/en/speeches/2025/october/documents/20251031-giubileo-educatori.html>（参照日 2025年11月3日）
- ・ジョン・コートニー・マーレイ著 / 光延一郎訳「キリスト教ヒューマニズムに向けて—教育と神学との関わり—」『神学ダイジェスト』No.136 2024夏、pp.52-63
- ・トビアス・ツィーママン（三嶋百合子訳）「イグナチオの教授法—ヒューマニズム+（プラス）の精神—」『神学ダイジェスト』No.136 2024夏季号、pp.9-19、上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会
- ・光延一郎「『キリスト教人間学』とカトリック的キリスト教ヒューマニズム」『人間学紀要』52号、2022、pp.9～39